1

生きた証から伝承まで11年間に取り組み・考えてきたこと

――大震災を語り継ぐ会での取組事例から

麦倉　哲[1]

要旨：
東日本大震災の被災地で実践してきた取り組み事例から、伝承とは何か、誰が何を伝承することなのかを考察した。伝承の焦点は、災害犠牲死と向き合うことであり、また地域社会の持続性に寄与することである。そこで、誰が伝承の当事者で、何を伝承するのかについて考察した。ケーススタディとして取り上げた「大震災を語り継ぐ会」の構成メンバーや伝承サロンの常連参加者が伝承活動をどのように継続してきたかもあわせて考察した。限られた期間を活動する一人ひとりの当事者が、いかにして他者とつながり、災害から命を守る地域社会の知恵を確立し継承していくのかも検討した。

キーワード：災害伝承、災害犠牲死、地域社会の持続性、公共圏、災害検証

1　震災伝承の多様な展開

東日本大震災が発生してから11年が経過して、「災害伝承」に関連する数々の取り組みが、注目を浴びている。被災地の活動としてしばしばニュースとなるのは、被災の痕跡を物語る景観や被災建造物などを解説する学習フィールドワークのような活動である。被災地内外から参加する生徒・児童、大学生や社会人グループ向けのプログラムが数々の工夫のもとに展開されている。被災地学習プログラムを考案し、ガイドや講師、語り部を養成することは、被災地の復興事業として存在価値があり、地域の災害文化に貢献するものである。災害は社会的な公共の事柄であることから、被災地域の住民の範囲を超えて多くの人へと災害学習のすそ野を広げ、多様な人々の防災意識を高めることは、防災の担い手の基盤の形成に寄与するものである。災害に関する学習活動は、災害を風化させないための意味も持つ。

被災地の復興は進んだともいわれるが、依然として重要な課題が残されている。それが、心の復興や伝承、地域社会の文化の再興ではないだろうか。復興を、ハードの復興、まちづくりの復興、

[1] 岩手大学地域防災研究センター客員教授

産業の復興、住宅の復興、心の復興、災害に強い文化の再構築などに分ければ、後方に示した、心の復興や災害文化の再構築などは、災後 10 年たっても発展途上にあるだろう。もしも、大方のインフラの整備や復興関連の住宅の再建をみて復興がほぼ達成されたという安堵に包まれたならば、災害として起こったことの事実の解明や記録化、災害の記憶の継承などの活動は停滞するであろう。

筆者は「震災から 10 年たっても、災害のことを忘れずに、社会的に共有し続け、また次世代へと橋渡ししていく活動への取り組みを継続し、こうした渦中にあって、当事者として橋渡し役をしていこうとする人が少なからずいる現状があるのではないか。そしてまた、そうした事業や活動が、世の注目を集めることもある。災害を風化させてはならないという集合的な現象が、いま目に入ってくる」と述べた[1)]。

2　伝承の焦点は「災害犠牲死」

2.1「犠牲となった人のこと」と「被災状況のこと」

震災伝承にはいくつか課題がある。基本は誰かが何かを、同世代の人たちや世代を超えて伝えていくことであるが、まず、何を伝承するのか、またどこに焦点をあてるのか。筆者は「災害犠牲死」が焦点だと強調したい。災害を繰り返さないためには伝承が必要という視点に立つならば、災害犠牲死を出さないために何を伝えるかも特に重要であろう（麦倉哲 2016）。

筆者は、災害の死を「災害犠牲死」とよぶ。災害の大きさが、犠牲となった被災死者の数で注目される以上、災害犠牲死に着目するのは、第一に、重要な観点である。ただし、被災した人の数の多さで注目されるものの、数多くの死は、その中の一人ひとりの合計であるから、そこでの注目はやはり、一人ひとりの死である。災害で忘れてはならないのは、被災前まで息づいていた一人ひとりの生命が犠牲となるということである。そこに、犠牲となった人がどのような人であったかを伝えることと、調べることの重要性がうかがえる。伝える内容は、①犠牲となったのはどのような人であったのか、そして次に、②その人はどのようにして犠牲になったのかである。

災害における死の意味をくみ取ろうとする活動がある。「生きた証をのこす活動」もその代表例である。筆者は多くの人たちと協力して、①亡くなったのはどういう人か、②どのように被災したのかの 2 点を主たる焦点にして、遺族や近親者等への聴き取り調査を実施してきた。語り継ぐためには記憶の継承が必要である。記憶の継承を媒介するのには、災害遺構も重要だが、犠牲死者に関する記録化の取り組みも重要である。

2.2 伝承する中身を構築していくこと

最も甚大な被災地であっても、遺族や近親者の喪失者は少数派である。加えて、災害時の状況を知らない被災地以外の人たちからは「逃げなかったから被災した」のではないかというような浅薄なラベリングがなされる。周囲の人からは「つらいことは忘れたほうがよい」という励ましを受けたりする。そのような経験の積み重ねの中で、被災者は徐々に口をつぐんでいく。被災を経験していない人々が犠牲死者やその遺族のことを知り、そうした人たちの経験や心情に共感する機会がいちじるしく減少していく。こうした中では、被災した個々人を孤立させない仕組みを作っていくほうがよい。多様な共感者、理解者、協力者が加わって、構築するつながりの場があるとよい。

伝承すべき普遍的なものが、あらかじめ自然とあるわけではない。伝承するためには（伝承するものを）「構築する（作る、編む、生み出し、掘り下げる）」作業が不可欠である。そのために多様な立場の人々が参画する「公共圏（ある公共の問題について多様な人々が参画し、協議する場所やつながり）」が必要である。当事者（遺族、近親者、寄り添い者、関心者）のほか、学校や生涯教育の場なども活用して、多様な世代の男女、多様な特性を持った人々、生徒・児童、教職員、行政担当者、研究者・科学者などが関わることが重要ではないだろうか。

2.3 復興と地域社会の持続性

そのうえで、筆者がとくにこだわり、焦点化したいのは、活動の舞台が地域であることである。伝承の取り組みは地域社会の持続性や、地域の災害文化の再構築、ひいては復興の全体像の確立のために不可欠である。地域社会の復興とは地域社会が持続的であることであり、災害による犠牲を再び生じさせないための地域の取り組み、災害文化、知恵の発揮、普及、継承であろう。

地域社会の持続性にとって、この「伝承」の取り組みや「公共圏」の構築が、一定の安定性を確保できているのかどうかによって、次の災害が起こるかもしれないという状況に対処する地域の力の威力は左右されるといえる。

景観的な面や、経済的な面からの復興の達成では足りないだろう。防災に関しては、ハードの対策、まちづくりの対策、ソフトの対策などの次元もあり、総合的な取り組みが重要であることはいうまでもない。地域社会が持続するために、多様な次元の復興の政策が展開されるが、地域社会が持続するためには、「伝承」の活動や取り組みも重要な位置を占める。伝承は、地域社会の持続性に寄与するものであることが大いに期待されるのである。伝承は復興を促進し、復興を支える重要な活動である。復興とは「持続性である」といえる状態に到達することであり、地域社会が持続することである。

災害犠牲死と向き合うことは、地域社会をベースとした活動が継承され、文化としての基盤をもつようになるということではないだろうか。高橋和雄は、災害伝承について、「命を守る地域の知恵」であると述べている。伝承は災害を繰り返さないための地域の知恵ということである。「過去に発生した津波の災害伝承が継承された地域では津波による人的被害が少なく、逆に災害伝承が途絶えた地域では同じ災害を繰り返したことが指摘されている」[2)]。

伝承は、災害による犠牲死者をなくすための地域社会をベースにおいた、取り組みである。伝承にどのような意味をもたせるかも一概に、決められるものではないといえるが、災害が起こると予測された時に、どのような対処をするのか、地域社会の中で備えておくことが望ましいのである。過去に起こった災害が予測される地域では、そうした災害が再び起こる可能性があり、災害の再発を防ぐため、同様の被災を繰り返さないようにし、被害の範囲をなるべく小さくするという命題にこたえることが求められるのである。

防災や減災ということでの対策は、行政によるもの、身近な地域社会や集団内部で実施すること、自分自身、個人個人によるものなどその次元も多様である。しかし、その舞台は地域社会である。地域社会にとって、伝承が知恵となりえているように安定し、継続した状態が保たれていることである。地域社会を持続させ、災害が繰り返されるのを防ぐために、いのちを守る知恵としての伝承はいかにして安定した状態を獲得できるだろうか。伝承という継続的な活動を誰が担うのか、そして何を伝承するのか、誰から誰へと伝承するのかという体制が自然とその地域社会の文化として定着している時に、地域社会の持続性が機能しているといえるのではないだろうか。

3　当事者の観点

3.1 公共の死、共同の死

災害は公共の事実であり、多くの人々がかかわる事柄である。災害における死は「公共の死」「共同の死」であり、それゆえ、社会の全体が伝承の当事者となりうるのである。

一人ひとりの災害犠牲死に焦点を当ててみると、当事者としての立場上の近さは、犠牲死者との近親性、距離感である。犠牲となった故人が何を思い何を伝えたいのだろうかということの理解や想像力のある者ほど、当事者性が高いのではないか。犠牲となった故人を内在的に理解できる遺族や近親者や、災害後にその心中や胸中を辿ろうとする継承者の継続的な営みが重要なのである。

伝承することの中身の核心部分は「犠牲死」であり、犠牲となった人のことである。伝承は、いのちを守る地域の知恵であるから、この地域社会の中で、どのような犠牲が起きたかは、その核心部分である。犠牲と向き合うためには、そうした

犠牲死がどのような状況で起こったかを知らなければならない。

被災死の状況について最もよく知っているのは、犠牲となった本人であるかもしれない。犠牲となった死の無念についても、当の本人が最も詳しいだろう。しかしながら、死の当事者への聴き取りはできない。犠牲死がどのようなものであったのかについて知るためには、遺族や近親者への聴き取り調査や状況調査を実施したうえで、死に至る原因の検証をすることも不可欠である。犠牲となって亡くなった人の行動や思いを理解し、一人ひとりの死と向き合うことが重要である。犠牲となった人のことを忘れないこと、また、犠牲となった人が何を伝えたかったのかについて知えるのも、伝えたい内容であるからである。

犠牲者の死を知る人は、犠牲死者の心情を理解し、その切実な心情を代弁できることが求められるであろう。そうした使命を担うのは第一に遺族そして近親者であるかもしれないが、そうした近親者でなくとも、近親者に代わって故人や遺族の意思を継ぐ者が現れるかもしれない。かくして、死者との対話や調査・検証や語り継ぎの場を経由して、東日本大震災のことを忘れずに、後世に伝える活動が多元的に展開されるかもしれないのである。

3.2 誰が何を伝えるのか

ここで明らかにしたいのは、いつ災害があり、誰の人命が損なわれたのか、その人命はどのような状況で被災したか、どうすれば被災はまぬかれたか、犠牲となった故人は何を思い伝えたいと思っているのかである。被災の事実として明らかにしたい諸々の要素は、5W1H に対応して整理して考えられる。（Where）ここで、（When）いつ災害があり、（Who）誰の（What）人命が損なわれたこと、（How）人命はどのような状況で被災したか、（Why）どうすれば被災はまぬかれたか、そして最後に、犠牲となった故人は何を思い伝えたいと思っているのか。

誰が何を伝えるかという点では、注意すべき点もある。助かった人の経験が語られることがあるが、その話は助からなかった人の経験とは離反することも起こりうる。助かった人の経験談は、被災の事実の全体を知るうえででは危ういかもしれない。「津波が来たから、急いで逃げた、その結果、助かった」「津波が近づいている様子をみて、すぐに逃げたから助かった」という話では、津波が来たからすぐに逃げたけれども亡くなった、犠牲となったという、犠牲者の経験が隠されてしまうからである。

避難して助かった人は、あと一歩間違えば、助からなかったという、生死の分かれ道の体験であるならば、そこから、犠牲となる危険について、考えさせられる話となるのだろう。

また、災害遺構のガイドでは、この高さまで津波が来たという証として遺構を見学した人には、ここにいたら助からないという想像をかきたてるだろう。しかし、この遺構との関連で、どのような犠牲が起きたのか、どのような危険が迫ったのだろうかということについて、どのような説明ができるであろうか。

震災遺族が代々、地域の災害文化の継承者として、誰かからの言い伝えの継承者として、無念の思いの代弁者や近親者として、当事者性を重きにおいた活動として伝えるのは、犠牲死のことである。それを伝える遺族か近親者は、被災の状況をよく知る経験を積んだ人であろう。それゆえ、伝承活動のスタートは、災害犠牲死と向き合い、犠牲死者のことを知ることではないだろうか。

4　生きた証を記録し語り継ぐ活動

4.1 前段：生きた証を記録し語り継ぐ会の活動 ■1　忘れない

こうした観点を踏まえて、以下では筆者がかかわってきた「生きた証を記録し語り継ぐ活動」をケーススタディとして考察したい。筆者がかかわり続けてきた伝承活動へとつながる道は、後付けてみれば、いくつかのステップに分かれる。その前半部分は、生きた証をのこすための大槌町での犠牲死者 1,286 名についての全数の聴き取り調査である（大槌町 2017）。聴き取りの対象は、遺族・近親者や関係者であった。そしてこの活動について、筆者らは現在も継続中である。

被災犠牲死と向き合い、災害犠牲死者のことを知り、犠牲死者遺族とともに、犠牲死者のことを忘れないと自覚し、犠牲死を検証し、遺族関係者が語り継ぎ、心の復興のために活動する取り組みをしてきたのである。

舞台は、東日本大震災の被災市町村としては、岩手県で最も甚大な経験をした大槌町である。この町では、2010年実施の国勢調査の結果と比べて人口の8.4％が亡くなった。主な被災3県では、宮城県の女川町が最も被災率が高く8.8％で、それに次ぐのが大槌町である。筆者らは他の研究者や研究室の学生たちと一緒に、2011年7月から大槌町での調査を始めた。

避難所リーダーインタビュー調査、仮設住宅入居者調査、自主防災計画策定に関わる活動、公営住宅住民調査などを順次実施してきたが、各種の活動をしながらも、絶えず、犠牲となった方々のことを念頭に置いていた。そして、2013年大槌町吉里吉里地区で犠牲となった約100人の被災行動調査を始めた。犠牲死者一人ひとりの災害検証が必要かつ重要なことであった。

翌年、大槌町の生きた証プロジェクトの調査を他の関係者や研究者とともに担当することになった。生きた証をのこすことについては、研究グループや研究室、被災地域住民リーダーの方々とともに、すでに着手していたことでもあったが、大槌町の行政と連携することになった。そして2016年に、「生きた証を記録し語り継ぐ会」（以下では「語り継ぐ会」）を発足させた。被災犠牲死者一人ひとりの被災状況を調査することや、被災死者一人ひとりの生きた証を記録しのこす活動については、大槌町役場とは別個に活動する段階を迎えていたのである。

4.2 四つの段階 ■2「つどい・向き合う」

2016年4月に発足した「語り継ぐ会」の旗揚げは、2016年9月の語り継ぐサロンというイベントの開催であった。大槌町をベースにして、大震災遺族と遺族に寄り添う気持ちのある人が中心となる活動である。そのためには、遺族関係者同士のつながりをつくることが肝要である。第1回の会合には、30人近くの人が参加した。その結果、参加したいけれども、人前に出るのがつらいという人の意向も知ることになった。そうした人のためには、活動の様子を通信（文書ニュース）で伝える活動をはじめた。

2016年9月から始まったサロン活動は、復興を元気づけるために、ボランティアが支援する活動でもなく、また、被災者の中で比較的元気でリーダーシップのとれる人々が復興をけん引する活動でもなく、何かの手作り等を学び実践する自己実現的なサークル活動とも一風ジャンルを異にするものであった。「語り継ぐサロン」という看板を立てたものの、その参加者は大震災の遺族が中心メンバーとして一定の割合を占めており、犠牲死者遺族の心の復興の歩みを進めつつ、震災を風化させないための語り継ぎを旗印としたものであった。

被災者の中には、家族を亡くした遺族と、被災経験がありつつも家族を亡くしていない住民が含まれる。家族を亡くした遺族の中にも深刻さの度合いの違いがあり、また家族を亡くしていない住民の間にも被災状態は多岐にわたるのである。一般に、そうした多様な被災経験のある住民が集まって懇談するとなると、被災経験について向き合うのがむつかしい面がある。被災経験があるものの家族が助かった住民の場合は、助かったという経験がある。しかし、家族を亡くした遺族の場合は、その逆である。住民相互の被災の度合いが異なるので、皆で話を出し合うのがむつかしい面がある。

被害の程度を出し合うだけでは、話し合いとしての充実感が持ちにくい。被災死者遺族がその傷む気持ちを話そうとすれば、もっとたいへんな人がいると言われることもある。せっかく話題にしたことの意味がつかみにくいのである。こうした背景から、多様な被災住民が集まるサロンでは一般に、被災経験や、被災犠牲死者のことに向き合うのがむつかしいのである。遺族が話した結果、心が傷ついたとなれば、二度と、人前ではそのことは話さないであろう。自分の心の中では決して忘れることにない事実や心境について、人前では語りたくなくなるのである。

こうしたことから、被災者を元気づける、元気印の人が集まるサロンではないこと、前向きな気

持ちを持つことが雰囲気的に期待されるサロンではないことをコンセプトにした。人前で、ましてや地元の人たちの前で、話を切り出すのも心理的な抵抗をともなう被災者遺族が集えるサロンとすること、遺族がいずれ安心して話せるサロンの雰囲気の構築を目指したのである。

ポイントは、犠牲死を念頭に置き、犠牲死者遺族がいわば主役であること、そして、遺族（近親者を亡くした関係者）ではない人の場合は、被災死者遺族の心情に寄り添うことができる人がメンバーであることをサロン開催の趣旨とした。語り継ぐサロンの中心に位置するのは犠牲となった故人であり、被災死者の遺族･近親者である。

かくして、こうした地平から新たなサロンを開催し準備できたのは、2013 年から 2016 年にかけて、死亡状況調査をしたり、生きた証をのこすプロジェクトを実施してきた積み重ねがあるからである。大槌町内のすべての犠牲死者一人ひとりの遺族との関係構築をする努力を重ねてきたという経験をベースに、単に聴き取り調査に終わらない、記録して終了とならないことを見すえて、信頼関係や親密さの構築に配慮して、活動を継続してきたのである。それゆえ、まったく自然な展開として、犠牲死者･故人や遺族の心情に向き合うという趣旨のサロンへと展開できたのである。

サロンでは次のようなルールを設定し、毎回、会の始まる時点で、相互に確認した。「1 自分のことを無理にお話しいただくことはございません。2 周囲の方がたのお話を聞くだけでも結構です。3 ご遺族でなくとも、傾聴の気持ちのある方であれば参加できます。」というものである。

このようにして立ち上がったサロンは、多少の紆余曲折を経ながら、またコロナ感染爆発の影響をもろに受けながらも、6 年をかけて表 1 に示したようなステップを歩んできた。2016 年 9 月から開始したサロンは、小さな活動を含めれば 100 回を超えているのである。

4.3 安心して集える場の構築 ■2「つどい･向き合う」

筆者らは、故人と遺族･近親者との相互関係に関心を寄せた。被災者と助かった人のあいだは分断されているのではなく、相互行為のようなものが、精神的な次元ではあっても続いているのではないかと考えた（麦倉哲 2017）。被災者が同じ地域の他者と話すさいに困難な面にも配慮した。被災者遺族の中には、悲嘆を経験し、活力を見出せない人も少なくない。そこで被災者遺族など気持ちの面で困難を抱える当事者への寄り添いの気持

表 1　100 回を超えた心の復興サロンの歩み

活動への助成分類	心の復興事業以外の活動*	心の復興事業による活動**	
サロンの分類	語り継ぐサロン	心の復興事業サロン	心の復興事業面談の活動（通信発行のための聞取り面談）
2016 年度	8		
2017 年度	7	16	
2018 年度	3	16	
2019 年度	2	24	
2020 年度	0	6	9
2021 年度	0	16	
小計	20（心の復興事業以外の小計）	78	9
合計		98（面談の活動を含む合計）	107（面談の活動を含む合計）

*　一部に「赤い羽根共同募金」の助成を受ける。助成を受けない期間は自己資金を投入。

**　心の復興プロジェクト（岩手県）の助成を受ける。助成を受けない自己資金も投入。復興関連の予算で、被災から 5 年後も心の復興支援が必要だという岩手県知事達増氏の方針に賛同し、2017 年度から 5 年間申請した。ただし、語り継ぐ会の活動は、心の復興事業で補助される枠を超えている部分は自己資金で運営している。

ちが醸成されるように配慮した。被災犠牲死者遺族・近親者と、避難して助かった人々との交流のむつかしさを乗り越えることにこだわってきた。また、被災者は大槌町（沿岸）にとどまらないので、大槌町ばかりでなく（内陸）盛岡市でのサロンの開催を模索した。

語り継ぐ会は、大学研究室に事務局を置くが、共同の研究者と、岩手県内の被災経験者、事務局支援者などで構成された。東日本大震災の遺族もその中心的な役割をもち、会の運営方針や実施内容について、工夫を重ねていった。2016年11月には会の概要について「語り継ぐ会として、これまでのみなさまの活動の成果、絆、方法・技術などをさらに研鑽し、大災害被災者（犠牲者、ご遺族、その他被災者）への傾聴・訪問、寄り添い、グループ活動、情報発信などにつとめていきたい」と位置づけた。

大槌町は、東日本大震災被災自治体で最も行方不明の比率が高い自治体である。行方不明者の遺族は、被災した故人を探し続けている。そこで遺族は、少しでもなんらかの手がかりがないかと、遺体安置所で知り合った人とつながり、同様の関心をもつ人が集うかもしれない場所に通うこともある。被災犠牲死者遺族を中心に置くこのサロンのもつ意味がここにもある。参加者の一人から「亡くなった祖母、母（行方不明）とのつながりなどを聞きたくて参加。教師だった祖母の教え子の方に会う」という感想が記された。

被災者が主役となる会の運営を考慮して、メインのゲストを呼ぶ全体の会を実施したあと、後半は、数人のグループに分かれて懇談をした。とはいえ、いきなり自分のことを話したいとは思わない人が多い。先に述べたように、自分自身のプロフィールなどは詳しく話す必要もなく、自分の体験を話すのではなく他の人の話をきくだけでもよい。そうしたルールをあらかじめ提示した。

サロンの終了後は運営スタッフ同士で振り返りをした。ある回の振り返りでは「グループ毎だと自分のことは話す」「以上の経過の中で、2時間を過ぎても帰らない人もいて、残っている人同士で、みんなで、第二次のお茶っことなった。お互いに、被災前の町で顔見知りであったが、話したことはない（これまでなかった）」などの気づきがあった。

被災前の大槌町での住民のつながりは、地区ごとに分かれているという側面が大きかった。大槌町内の安渡地区、赤浜地区、吉里吉里地区、町方地区など、地区の独立性が高かったようだが、被災後は地区を超えての仮設住宅暮らしがはじまるなど、多少なりとも地域の境界意識は変わったように思われる。

震災時に大槌町に住んでいた被災者のなかには、町を離れる人もいた。こうしたことから大槌町を媒介としたつながりは岩手県内陸、東北、首都圏などにも広がっていた。生きた証の聴き取りでは、町を離れた遺族へも聴き取りに出かけた。そうしたことから、2016年後半のサロンでは、岩手県内陸の盛岡市で実施した。

「従前は、地区内の共同性が強かったが、震災を経て、地区の共同性が再編され、あるいは内陸に避難しふるさとから離れる人も少なくない。そうした方がたが、共同体のくくりを超えて、もう少し広い範囲で、経験や郷愁を共有する場ができる意義がある」という意見もあがった。

4.4 2017年度の活動 ■3「つなぐ、つながる」こと

2017年度に入って、2年目のサロンは、共感できる他者とつながることができればと考えた。初回は、岩手大学佐々木誠准教授に「喪失と物語り」と題して、ミニレクチャーをしていただいた（岩手大学教育学部社会学研究室 2018）。サロン参加者の感想では「初めて参加させて頂きました。知っている方は少なかったと思います。今後もこういう会があってもいいと思いました。6年前と今をくらべて見るとだいぶ心もおちついて生活をしています。亡くなった人たちも私と一緒にいつも私のリュックサックの中に写真を入れて歩いていますのでいつも私と一緒です。（60代、女性）」というものであった。

この年から、被災者同士のつながりを求めて、仙台市においてサロンを開催した。この時のサロンに参加した人は、自身の被災体験談を語った。東日本大震災で兄を亡くしている。

「末の松山波こさじ」という言い伝えが多賀城

市にはあるが、それが生かされなかったというのである。この言い伝えは、宮城県多賀城市に古くからあるものである。末の松とは、市内の宝国寺の裏手にある松のこととされる。この言い伝えから、これを知る多くの市民は、このお寺に避難してきたという。しかし、サロンに参加した A さんが見た光景は、違っていた。それによると、海岸に近い住宅にいたこの証言者は、上の言い伝えにより、宝国寺の高台のほうへ急いだが、その途中で見る人々の慌てぬようすに驚いたという。海に近い大型ショッピングセンター付近にはたくさんの人いた。心配になった A は、ショッピングセンター入口の警備員に忠告した。ここは危ないから、買い物客を屋上に避難させよと言ったのである。しかし、その警備員はだめだと言う。津波が来るからと再度言うと、骨組みだけの立体駐車場の上階にまず避難させ、その後バス等で安全な場所に運ぶというのである。それではダメだと警備員に伝えた。津波は、軽量鉄骨 2 階建ての駐車場の高さにおさまるわけはないと再三警告して、自分は末の松山のほうへ急いだ。高台までたどり着かなかった人の多くは被災したと思われる。途中の、大手アパレルショップは、店を閉じて客を出したものの、その後、店員たちはショップに残って会議をしていたという。その結果、シャッターを下ろした店内にいた従業員は、津波に襲われて全員が犠牲になったという。しかもこのことが報道されていないということに、恐ろしさを感じたというのである。

この時の話は、亡くなった犠牲者の視点で語られた貴重な話であった。組織の中の死は、目撃者がいなかったり、目撃者が限られたりする。そしてその貴重な目撃者の証言に歯止めがかかれば、犠牲死者のことは検証の遡上にも上げられない。

4.5 2018 年度の活動 ■3「つなぐ、つながる」をさらに

次の世代に何をつたえるかという課題がある。伝える内容を掘り下げるために、被災時の検証を進める必要があり、記録したり加工したものを発表する機会をつくっていく必要もある。それが、防災の文化の構築につながる。

2018 年 5 月、東日本大震災被災犠牲死者の被災時の行動を紹介した。①地震発生時、② 10 分後、③ 20 分後、④津波の到達時の地点を、遺族や関係者からの聴き取り調査結果から明らかにし、故人がどのように被災したかを被災者の立場に立って振り返った。

B さんのケースは、自宅兼店舗から避難しなかったと思われる高齢自営業主の女性のケースである。この女性の娘は避難所にいったん避難したのちに母を助けに向かったのである。大槌町町方地区では非常に多くの自営業主が被災した。避難意識はけっして低くないものの、人生のよりどころである店舗・事業所を離れるという選択がむつかしい。1960 年のチリ地震の記憶では、津波は数十センチであった。また、その後は、ハの字型防潮堤ができた。水門ができた。こうしたことも正常化の偏見につながったのである。

高齢自営業主の娘と孫も被災した。娘と孫は避難のためにいったん高台の避難所に避難したものの、母（祖母）の身を案じて避難させるために町中の店舗兼住宅へと下ったと思われる。祖母から孫までの 3 代が被災したケースである。

「語りつぐサロン」の会場は、「つなみてんでんこ」とはいかない現実を知った悲しみに包まれた。しかしながら、当事者の視点に立って、当事者は何を考え行動ができたかをサロンの参加者が共有することが重要であり、また遺族の悲しみに共感する気持ちの広がりも重要な意味をもつのである（麦倉哲・野坂真 2019）。

後半は、集った人々が 3 つのテーブルに分かれて、3.11 の経験を振り返った。被災行動に関する検証と向き合うことになる。避難しなかったから被災したというステレオタイプに陥らない背景的な要因も併せて理解し、語り継ぐことが重要であった。

11 月には、盛岡市内の岩手大学を会場として、伊藤陽子写真展（2012 年に続いて）と大久保正人ライブを開催した。倉堀康の写真のコーナーもつくられた。伊藤陽子、大久保正人には、トークライブと題して、被災時の経験やその当時を振り返る現在の想いなども、公開インタビューでうかがった。語り継ぐ会の中心的な存在のこの 3 人は、被災犠牲死者遺族でもあり、その体験を

もとに、自分の人生についても、また震災についても、自身の想いを込めた語りもできる当事者であった。被災地大槌町のことを語り継ぐ人は、現に大槌町にとどまっている人に限らない。被災前から首都圏に住む人、被災後に首都圏へと移った人なども含まれるからだ。そのほか、大槌町の過去とこれからに関心を注ぐ人なども関係者（関心者）に加わる。心の復興サロンは、こうして東京での開催にも踏み切り、2019年1月と2020年1月に開催された。

2019年1月には、心の復興サロンを東京の新宿区で開催した。東京でのサロン参加者と大槌町でのサロンつなぐ意味で、早稲田大学の野坂真さん（助手）の発案で、大槌町の様子をドローン映像で上映するなどした。東京からは大槌町住民様へのビデオメッセージをいただいた（岩手大学教育学部社会学研究室 2019）。

そして2019年の3月、毎年開催する語り継ぐ会版の慰霊の集いは、大盛況となった。南北リアス線の開業の日は、大槌駅前では盛大な祝賀行事が繰り広げられた。その一方で、語り継ぐ会は、シーサイドタウンマストにおいて、慰霊のコンサートを開いた。東日本大震災の遺族もメンバーに入った「マカナアロハ」のフラダンスと、和楽器奏者大久保正人のライブが慰霊の意味で上演された。会場には、これまでのサロン参加者はじめ、ショッピングセンターに足を運んだ人々で埋まり、100人を大幅に上回るイベントとなった。被災経験を忘れずに、復興へとつなげる精神の高揚がえられたように思われる。

4.6 2019年度の東京での開催 ■3「つなぐ、つながる」をさらに広げる

2019年度は、語り継ぐ機会をおおいに広げた年度であった。年度終盤の2020年に、コロナ感染が広がっていくとは、思われなかった。こうした中で、大槌町と盛岡市、仙台市と東京都など各地で、数多くのサロンが開かれた（岩手大学教育学部社会学研究室 2020）。

2020年の1月には、早稲田大学（浦野正樹教授、野坂真助手）の支援により、東京での写真展を開催した。被災者遺族でもある伊藤陽子と同じく倉堀康が撮影してきた大槌町の町の変化を展示した。早稲田大学を会場とした東京でのサロンでは、新聞の予告報道等で知った大槌町出身の東京在住者や被災地に関心をもつ人々が訪れた。被災地関連の新たなつながりができた。

それまでも伊藤陽子は、東京でもまた外国でも、写真展を開催してきた。写真を展示するのは、被災した直後の大槌町を見ていない人が多いだろう、そうした人たちに、まちがどのように被災し、その後どのように歩んでいるかを見せたかったからである。時がたてば忘れ去られてしまう、被災前の風景から、被災直後にしか見られなかった数々の爪痕、茶色と灰色に染められた街、そして花や草木の回復など、それまであまり人物を写さなかったという陽子は、流された街を呆然とみつめる人の後ろ姿や、被災した町の道路に復興の希望の落書きする子どもの様子など、被災地の人や子どもにもレンズを向けた。

倉堀康は、被災から9年間、こだわりをもって撮り続けてきた写真を展示した。それは、被災から9年間、被災により一人ぼっちになった倉堀の人生の歩みを物語るものであり、また、被災した故郷の忘れてはならない様相を記録するものであった。

4.7 伝承ミニサロン ■4「つづける、伝えること」へ

2020年度のサロンは、これまでサロンを担ってきたり、サロンの活動に協力し常連的に参加してきた人々が、他の人々にあるいは町の人に伝える、そして次世代の人々にも伝え残していくということを意識した年であった。いよいよ伝承がテーマといえる。

コロナが蔓延する中で、サロンの開催が危ぶまれた。その中でも、何かできることはないかと、伝承ミニサロンを開催した。伝承サロンとして、それ相応の人の前で、自分が他の人に話し、また次世代に伝えたいことを話せればよいのだが、それがむつかしい。コロナの影響下で、衛生環境を整え密を避け、ごく限られた人を相手に、後世に語り継ぎたいことを語ってもらった形である。これには、多くの人の前で家族を亡くした被災体験

を話すのは、現時点では抵抗があるという方も、少人数が相手ならばと、協力して話してくれた。

その一人が、被災時の消防団長の煙山佳成である（岩手大学教育学部社会学研究室 2021）。被災により、母と妻と息子を亡くした。団長は地震後に、職務に就くために消防団本部へと向かった。各方面に指示を出し、自身も避難広報をしている途中で津波の襲来を受けて、ギリギリのところで助かった。そこから、山の岩場の高台で一晩を過ごし、翌日に城山に新しくできた町対策本部へ着き、消防団の臨時の本部を立ち上げた。職務に向かうために自宅を出る際に、家族には避難するようにもっとはっきり言えなかったかと、悔いの残る 9 年間を過ごしてきた。再建した以前よりこじんまりとした住宅には、忘れな草のステンドグラスをはめ込んだ。被災した家族のことを決して忘れないためである。

被災により中学生を亡くした母親は、行方不明となった息子を探しまわった。そして、津波で折れ曲がった息子の自転車をみつけた。その時に撮った自転車の写真を見せてくれた。そしてその時に、息子は祖父と祖母と家へと向かったのだということが、改めてわかった。以来ずっと、この写真を大事にしている。

この年の年度末にあたる 3 月 11 日は、東日本大震災から 10 年が経過する大槌町東日本大震災津波追悼式（主催:大槌町）が行われた。そこで、語り継ぐ会の中心メンバーの一人である倉堀康は、東日本大震災遺族を代表して追悼の言葉を述べた。倉堀康は、自身のあの日からの体験を述べた後で次のようにまとめた。

写真 1　被災した C 君の自転車

> この大震災で私は、「数多くの大切な命やものを失い、悲しみ、苦しみ、辛いときも有りました。しかしながら、大震災後に出来た「新しい出会い、絆」もまた、私の支えになっています。この先、震災を忘れ去らない事や、また災害の時に私たち家族の様な犠牲者が出ない事、そして震災の記憶の風化させない事のために、震災経験者の一人として私が出来る事は、体験した事を話すことしかありません。微力ではあっても、これからもずっと、伝えて行きたいと思います。
>
> （倉堀康「遺族代表として」原稿より抜粋）

5　集大成としての伝承サロンの開催

5.1 伝承大サロンの開催:「忘れない」「つどい・向き合い」「つなぐ・つながり」「つづけ・伝える」

2021 年度は、コロナ感染症の影響が続く中で、伝承という位置づけを前面に出した。大震災から、かれこれ 10 年が経過した。この語り継ぐ会は、2016 年 4 月に発足し、9 月に最初のサロンを開催した。発足以来、約 100 回のサロンが開催された。独自の活動として発足し、赤い羽根共同募金の助成を受けたり、復興庁・岩手県の心の復興事業として補助を受けることができた。

被災した方々にとって、復興にはいくつもの困難があって、①暮らし向きの復興、②人とのつながりの面の復興、そして③気持ちの面の復興、別言すれば、「心の復興」の面ある。心の面で打ちひしがれた方々の心の復興はいつもその途上にあり、また、時間が経てば改善されるという単線的なものでもない。忘れることのできない出来事と向き合い、あれ以来変わってしまった人生を歩んでいる人にとって、常日頃、自分の人生はどうであったのか、どうであるのかという気持ちを持ち続けていると思われる。

サロンの運営者は、大震災で犠牲となった方々のことを忘れない、震災ご遺族の方々とともに歩

んでいこうということで、この会を始めた。震災では助かったものの、その助かった人を看取るという経験も徐々に増えている。

故人を想い、忘れずに、供養して、また故人と心の対話をして、語り継ごうという気持ちにある人々がたくさんいる。町の出来事として、決して風化させることなく、被災の経験を伝承していこうという人もたくさんいる。大震災における経験は人によって異なるものの、①震災で経験したことを忘れずに、犠牲となった一人ひとりのことを忘れずに、②被災や犠牲の事実に向き合い、どうすれば犠牲とならずにすんだのかの検証を尽くし、③このことを語り、伝承し、教訓として、つないでいく、託していくことを考えていければという考えが深まってきたといえる。①忘れない、②向き合う、③つなぐ、そして④伝えるの4つである。

5.2 伝承の段階へと入った2021年度の活動

5.2.1　2021年度伝承サロン第1回目：伊藤陽子

伊藤陽子の写真展ではなく、写真スライドショーを実施した。会場は大槌町の目的ホール、コロナの影響下でも、50人ほどの人が集まった。地元で語るのは、少し勇気がいる。しかし、語り継ぐ目的の一つは、地域社会のためでもあり、地域の災害文化（災害伝承文化）の構築とも関係する。被災前の大槌町も振り返りつつ、震災の津波の度合いを示す指標の乏しさにも言及した。

5.2.2　第2回目：大久保正人

大久保正人自身は、町方に不動産業の事業所と自宅があり、地震後に、家族と一緒に避難したが、その避難の前に、親交のある近くのお店にも避難をよびかけた。そして、避難場所となっているお寺の方向へ急いだ。少し迷えば確実に被災したに違いない経験をした。別の家に住む父は被災して亡くなった。

空虚な気持ちが正人を支配した。正人は和楽器奏者である。被災後に、すべての楽器を捨てて音楽をやめようと思ったが、被災の報道を知った見知らぬ遠方の方より尺八が届けられた。試しに演奏することからはじめて、改めて、楽器の演奏と向き合った。津波で襲われてがれきにおおわれた町の中心部で、それでも、家があったと思われる場所に向かった一軒一軒に手を合わせる僧侶の様子をみた。雪がしんしんと降りつもる寒い日のことである。この様子を曲にした。人はなんのために生きているのかなども見つめなおして、座禅を組み、もともとあった、ふるさとの風景を思い創作を重ねた。

第2回伝承サロン「震災後に見た風景と音」では、自らも震災遺族の和楽器奏者大久保正人が、①第一部では、大震災でみた風景や心象など、②第二部では、人のくらしと自然のことについて、演奏した。参加者は、奏者で被災経験者の大久保正人との懇談のひと時を過ごした。集まった者同士で、近況を伝え合う場ともなりった。これまでサロンが続いたことに関して感謝を述べる者もあった。

5.2.3　伝承サロン第3回目はマカナアロハ（フラダンスとメッセージ）

クリスマスの夜、大槌町“おしゃっち”のホールで開催された。マカナアロハのメンバーと大久保正人の総勢22名が舞台に立ち、舞い踊り、演じ、今はなき故人へのメッセージも披露された。舞台出演者はアンコールの拍手に応えつつ、聖夜は深まり終演となった。

コロナ禍で、開催が危ぶまれるなか、入場検温、消毒、ディスタンスなど、来場者の協力で、無事開催することができた。20曲を演舞の途中

写真2　マカナアロハのフラダンス
（前段が代表小笠原弘子）

で、震災で夫を亡くした菅谷あやのスピーチや、代表小笠原弘子が昨夏亡くなった夫（新・あらた）への感謝の手紙を朗読する場面もあり、震災10年にふさわしいイベントとなった。夫・新は大槌町議会議員や保護司を長年務め町民の保護に尽くし、また震災犠牲者を弔う気持ちの強い人であった。

5.2.4　伝承サロン第4回目は村上民男（アマチュア写真家）

大槌町シーサイドタウンマストのマストホールにてアマチュア写真家村上民男を講師に招き、村上が撮ってきた写真について解説した。村上は「写真集団はまゆり会」を結成し、長年、写真を撮り続けてきた。自然が織りなす美を探求している。

しかし、その日（3.11）はいつもと違った。大地震に驚いた村上は、浪板海岸へと向かった。第一波が引いていく様子を海岸に近いところから撮影していると、引き波の戻る沖に白波が立っていた。これは写真撮影どころではないと直観して、山側の高台へと急いだ。振り返って、観光ホテルのほうを見ると人がいた。「波が来るから逃げろ」とありったけの大声で叫んだ。シャッターを切りながら……。津波が押し寄せる前からの貴重な写真だ。写真は、妻の家族が犠牲となった釜石市鵜住居地区を記録したものへと進んだ。

村上の話は復興途上の町の写真にも及んだ。南北リアス線が開通し、色とりどりの車体が浪板の林や鉄橋を走る。背景の青空には、白い雲が鮮やかだ。追悼供養の意味を追って、新造船の出航の式典や、黒森神楽の写真も披露された。

5.2.5　伝承サロン第5回は、倉堀康と麦倉哲

被災者でありスタッフの倉堀康が、震災から撮ってきた写真を上映しつつ、それにともなうエピソードや震災後の活動について話した。津波浸水時にいた場所、家族皆が被災したこと、避難所リーダーを務めたことなど10年間を凝縮する内容であった。その後、麦倉が伝承活動が世代を超えて引き継がれていく様子などを図解して説明した（本論後述）。会場からの意見も活発に出された会であった。

5.3　2022年3月19日慰霊のセレモニー

5.3.1　セレモニーの全体像

2022年度をしめくくる「慰霊のセレモニー」が開かれた。その日の天気は、11年前を思い起こさせるような雪が降りしきるという荒天であった。しかしながら、コロナの影響もあるなかで、約50人の参加者が詰めかけ、ソーシャル・ディスタンスをとりながらも、なかなかに活気のある会場となった。

司会のあいさつの後、麦倉から1年の振り返り、アンケート結果の報告の後、盛岡在住のスタッフや関係者からのビデオレターが流された。語り継ぐサロンのつながりは、大槌町を拠点に各地へとつながっていることが再確認できた。

その後、大槌在住のご遺族を中心とした被災者の方からのメッセージ、和楽器奏者大久保正人とマカナアロハ（フラダンス・サークル）代表小笠原弘子が「涙そうそう」のコラボ、最後にご遺族の菅谷あやさんからご挨拶いただき、会は終了した。

5.3.2　東日本大震災と戦災と向き合ってきた5人の伝承

今年のセレモニーの特徴は、大槌町在住の5人による伝承の活動の様相をとったことである。

①川端喜久子は、被災により数多くの知り合い

2022年3月11日　心のサロン通信第6号
「心の復興」サロン
伝承サロン第6回

東日本大震災
2022慰霊のミニセレモニー

■日時　2022年3月19日（土）正午～13時半
■会場　大槌町文化交流センター　多目的ホール

当初予定していた「＜東日本大震災＞慰霊のつどい・コンサート」は、新型コロナ感染症の拡大のため、延期とします（日程は未定）。皆様には、お見舞い申し上げます。
代わりに、ミニセレモニーを開催します。①この1年を振り返り・皆様から寄せられた声を紹介、②慰霊のメッセージを天に伝える、③『涙そうそう（小笠原弘子（マカナアロハ代表）＆大久保正人（和楽器奏者）』＋1，2曲の演舞、④盛岡からのビデオレター、⑤この1年の御礼と終わりの挨拶、といった内容です。ささやかな慰霊のつどいです。
この状況下で、ご参加できる方々に限定のイベントです。

写真3　2022慰霊のセレモニーチラシ

を亡くした悲しみに触れつつ、被災地学習に訪れる生徒たちに、避難することの大切さを説くようすを話した。

②金﨑正子は、役場職員の遺族である。役場職員の被災の状況は、なかなか明らかとならなかったが、被災時の検証がともなわないことに、内外からの批判があった。2021 年に記録誌が作られ、犠牲となった職員の被災状況が、ある程度解明された。防災意識の高かったと思われる夫が被災したことについて、状況の調査に協力する職員が数多く出てきたことに感謝しつつ、無念の思いで被災した夫へのメッセージを読み上げた。

③徳田俊美は、被災した母に向けた話をとりやめ、山道のもつ意味を話した。

④芳賀正彦は、多くの人が津波を逃れ避難したものの、約 100 名の地区の住民が被災した悲しみの中で、避難所運営にあたりながら、夜番の焚火の炎の中に、犠牲となった地区の住民の面影を思った。そして、復活の薪事業に思いをこめる決意を話した。遺族でなくとも、地区の住民の悲しみが深いことを代弁したのであった。

⑤越田征男には、戦争でなくした父の話をしていただいた。自然災害も戦争災害も、多くの人を犠牲にしたという事実があり、大槌町英霊録（大槌町遺族会 2016）を編纂してきた越田は、東日本大震災も忘れてはならないが、戦災による死も忘れてはならないことを語った。遺族や近親者の悲しみは共通し、町や地域社会の全体がうけたダメージも計り知れないほどであることも共通しているのである。

かくして、2021 年度の 10 月から 2022 年 3 月までの約半年間は、大槌町における災害伝承の活動の新境地を切り開くような活動となった。しかし、これは一朝一夕により成り立ったものではなく、被災者と寄り添い者が、被災の事実と向き合い、つながり、研鑽のうえに、活動を続けてきた成果であり、今も途中経過なのである。心の復興過程でフラダンスに打ち込んできた菅谷あやは、今日の慰霊の集いへの来場者に対して、最後の感謝の辞を述べた。

6　遺族を取り巻く絆の形成と伝承

6.1 喪失したつながりと地域社会の持続性

大震災でひとりぼっちになってしまった遺族には、しばしば新しい人間関係が生まれる。故人との精神的なつながりを持ちつつ、人生を開拓している様子だ。一人ひとり違った被災状況だが、そこには地域社会を持続させるつながりのようなものも、しばしば生まれる。伝承の活動も、そうした人間の織りなす営為の中で、発露しているのではないだろうか。

復興とは、持続的であること、あるいは持続的な状態を取り戻すことである。個々人の生命が持続的であり、個々人の生命の連なりにより、世代を超えて生命、生活が持続的であること、ファミリーサイクルやファミリーを越えたサイクルが持続的である如くに積み重なり、そして、地域社会が持続的であること、さらに、各種の環境の諸条件が維持され、各種の資源が活用されまた蓄積さ

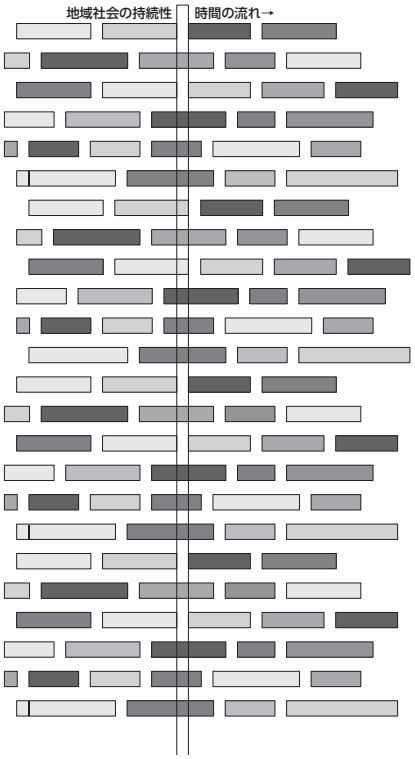

図 1　一人ひとりの命の長さと地域社会の持続性

れ、その総体として地域社会が持続的であることである。つまり、持続性を取り戻すことが復興である。

筆者が10歳にも満たない子どものころ、人ひとりの人生は、とても長いものだと思っていた。70歳か80歳か、それくらいまで生きることは、その当時の年齢の期間の10倍にも及ぶことだったから、人生の段階でも、ライフステージで考えても、まだ次々とやることがあるのだと考えていた。また、亡くなるのが怖かったから、いま生きていることの連続の先は考えられなかった。

社会全体や地域社会は、人ひとりの人生の長さをはるかにずっと超えて、永遠とは言えなくとも長期にわたって持続する。それと比べると、一人の人生の帯は永遠とはいかず、一定の長さである。一定の長さの横にした短冊のごとくである。それぞれの特性が発揮され、それぞれのカラーをもった短冊のようだ。人によってその色は異なり、また、長さも微妙に異なっている。少し短めの人もあり、長めの人もある。

多様な人々の、人生のつらなりで、地域社会は持続している。たとえば、右から左へと流れていく如くであるといえる。カラーも、微妙な長さも、バラエティに富んでいて、その集まり、集合体が図1のごとくである。

6.2 大災害によるダメージ

ところが大災害のような、それぞれのライフステージを歩んでいた人々の一部に断絶をもたらすような事件が起こる。多くの人が災害の犠牲となる。それぞれの人の人生の歩みが閉ざされてしまったということである。被災地の家族はそれぞれに大きなダメージを受け、家族のほぼ全員が犠牲となるようなこともある。いろいろな人が織りなしてきた地域社会の持続性は、危機に瀕するといえる。地域社会の持続性について、甚大な被害が生じたということで、故人を思い悲嘆し、あの人がいれば、この人が……という悲嘆や無念が、残された住民たちの心に去来する。

被災によって、家族の多くを亡くした人がいる。大人数いた家族の中で、一人生き残ったという方もいる。その遺族は、一人ぼっちになってしまったのだけれど、まったく一人かというと、ひとにもよるが、こんな時に不思議と、亡き故人とあるいは不明の家族と、なんらかの精神的なコミュニケーションが生じるのかもしれない。

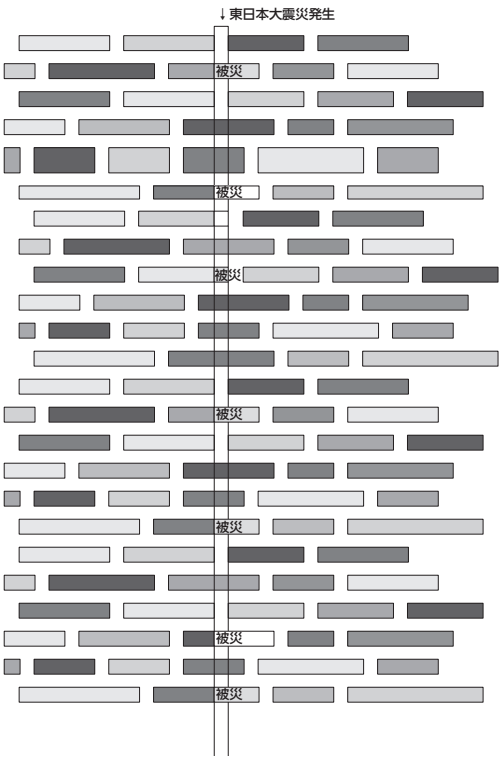

図2　大災害で途切れた生命の持続性

しばらくして遺族は、遺族のことを案じて、あるいは故人とのつながりの関係で、それまでにない別の関係が生まれるかもしれない。そしてまた、被災者に関心を寄せる多様な人たちが近寄ってくるかもしれない。家族ではないが、他者との関係が生まれ、一時的な人間関係が定期的な対話を続ける関係となったり、あるいは、家族ではないものの遠い親戚のような関係に至ることもある。

遺族のライフステージによっては、新たな家族の形成へと進展していくこともあろう。被災状況の甚大な地域では、生き残った人の家族関係はいちじるしく乏しくなったために、それでも、この地域社会を持続させていくために、家族関係を意図的に再編し、疑似の家族を編成し、一人ぼっちに近くなった一人ひとりの生活の持続をはかり、家族の持続をはかり、地域社会機能を維持させてきたところもみられた。明治三陸大津波でのこと

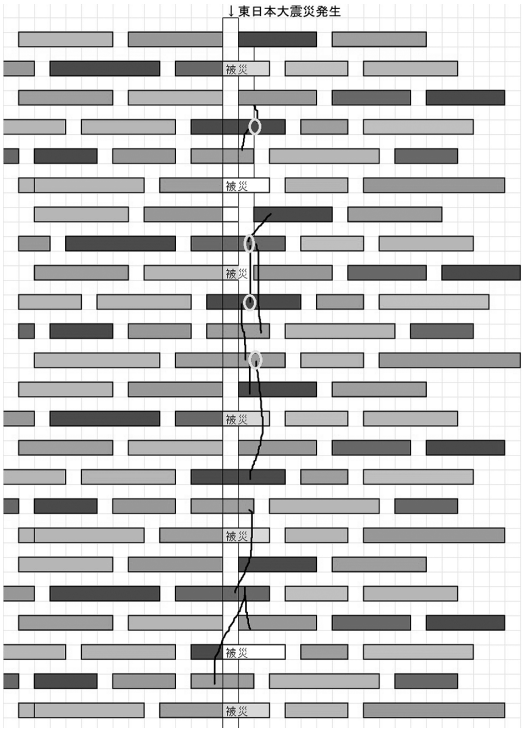

図3　被災遺族が築く新たな絆

である。

明治三陸大津波の時に、住民の大半が犠牲となった山田町大沢地区では、そこで、生き残った限られた人を家族のようなグループに再編するかたちで地域社会を持続させたという。疑似の家族が形成されたというのである。遺族がばらばらに、暮らしを営んでいくことは困難である。とはいえ、多くの人はこの地区を去るという選択肢はなく、とどまろうという思いも強かった。それまでの血縁とは違った、家族が編成されたのである。その結果、あらたな家族で迎えた昭和の三陸大津波の時には、大きな人的被害を出すことなく、乗り越え歩んできたのである。それを語るのは、編成された家族の子孫で、地元の学校である大沢小学校で教鞭をとり、のちには校長をも務めた箱石敏巳さんである。山田町立大沢小学校(2020年3月に統廃合)の全校表現劇「海よ光れ！」の創作者の一人である。

6.3 持続的であるために

家族というかたちで新たな再編を町や地区ぐるみで実施しなくても、震災で家族を亡くした遺族は、犠牲となった故人との対話を続け、関係的に乏しくなった家族の代わりというのではないにしろ、家族的な遠い親戚的な関係を広げることが少なからずみられる。志をもって被災地に通う人は、犠牲者遺族と寄り添い、悲しみや苦しみに共感し、死者との対話にも割り込み、一定の関係の位置に存在することもある。それが一定期間であったり、間欠的であったり、かなり長期にわたるものであったりするのである。実際に、家族・親族的なつながりのようであったりなど、関係に入り込んでくることもみられるのである。

相対的に手薄化した地域社会の関係は、故人との、いわば死者との対話や、遺族への関係的なアプローチなどにより、ある種の、地域社会の持続させる担い手の一助になることもあるだろう。①自助による展開・構築、②共助による構築、③市民協働による構築、④公助による強力な支えなど、多様な次元での関係の構築が、その後の地域社会の持続性を支えていき、発展させていくこともあろう。

6.4 犠牲死の渦中、ある家族:自助（対話）共助（続ける、つながる）

犠牲となった人そのものも、被災して終わりではない様相を、筆者は遺族への聴き取りのなかで数多く実感してきた。ある人生の時点での死が、その後の人生のまったくの空白ではなく、図4の中間の帯図のように、あいまいになんらかの形で、たとえば遺族や近親者、さらに故人への想いをよせる人の気持ちのなかに、なんらかの淡い形で存続しているのではないだろうか。

図5からは、被災により、家族の中で一人ぼっちになったとある被災者のことを考えたい。東日本大震災においても、コミュニティの総意によるものではなく、個々人のめぐりあわせにより、近親者、地域関係者、寄り添い者、ほかからの支援者との共助や関係交流によって、絆がつくられていくことが多々みられる。家族ではなくとも、拡

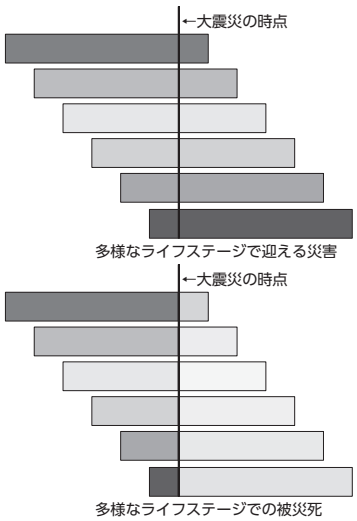

図 4　多様なライフステージの人と被災
（生の切断、生のあいまいな存続、生存の三つの層）

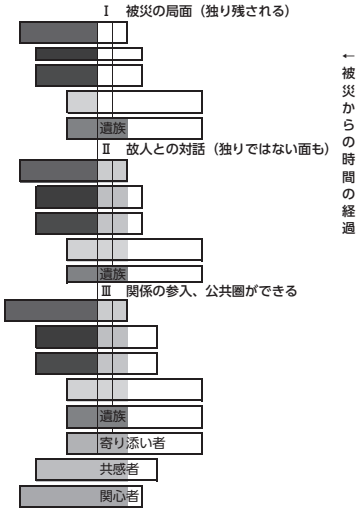

図 5　あるケース：多様な関係が生まれた

大ファミリー的な関係が疑似的につくられたように思われる。こうした関係の形成の中から、一人ひとりの被災者遺族の生活が持続し、周囲の寄り添い者の理解や協力もえて、語り部や伝承者になっていく場合もありうるのである。こうした関係性から公共圏（つなぐ、つたえる、伝承）が構築され、互いに家族ではないけれど、それぞれに家族目線の伝承者のようになることもあろうし、故人の遺族や近親者を介在して、死後に故人と知り合うかのような存在になるかもしれない。

地域社会の中で起きた犠牲死について、決して忘れてはならないという遺族がいる。しかし、その遺族が、語り部、伝承者となるには、いくつかの段階があるだろう。故人の死が、家族内の出来事ではなく、公共の死として受け止められるような公共圏が構築され、それ相応の連携者や共同者との活動の継続のなかで、自身が地域社会の同世代の他者や次世代の他者に伝承していこうとする生き方を選択し、さらにその活動を継続しようとする場合である。

7　伝承と重なる「次世代育成」の発達課題

7.1 語り継ぐ公共圏を担う人

筆者らが活動してきた 2011 年からの 11 年間は、被災犠牲死者の遺族や近親者を中心に置き、それに寄り添い、この活動に共感を覚え関わろうとしてきた人々による公共圏の確立と推移というべきものではないだろうか。

災害犠牲死者のことに絶えず関心を寄せ、起こったことと向き合い、同様の被災を再び繰り返さないための検証を重ね、忘れてならない記憶を継承し、記録を作り上げてきたといえる。犠牲死者と遺族とをつなぎ、遺族と寄り添い者とをつなぎ、公共の死や共同の死と向き合う横のつながりを広げ、そして、被災経験のない人や次世代の人へと縦につなぐ活動をしてきた。

この活動を担い、参画してきた人々は、最終的には、誰かとつながり、また誰かへとバトンをつなごうとしてきたのではないだろうか。遺族の面々や筆者らとともに活動してきた人たちのライフステージを、おおまかに考慮すると、ある人生の発達の課題を遂行しているようにも思える。

7.2 7 つめと 8 つめの発達の課題

社会心理学者エリクソンは、人生の発達の課題を 8 つあると掲げた。その 7 つめ（壮年期あるいは成人期）と 8 つめ（老年期あるいは成熟期）の課題に、本プロジェクトにかかわってきた人は取り組んだものと解されるのではないか。7 つめは

ジェネレイティヴィティというエリクソン造語の概念で、世代性とか生殖性とかと訳される。筆者は、この概念に含まれる世代継承性の役目に注目したい。藤岡裕美は「ジェネレイティヴィティは、新しいものを創造し育成し、それによって次世代を育て、世界や社会を支えるという他者や世界へ精力的なかかわりをもとうとする感覚」と解し生涯学習論へとつなげている[3)]。

8つめ老年期（成熟期）は、エゴ･アイデンティティの概念に集約される。人生の集大成である。本プロジェクトに関わってきた若手の人たちは、6までの課題にも取り組んでいたであろうが、筆者と同等の年齢のステージの人々は、この7つめと8つめが大いに関係していたと思われる。

東日本大震災で経験したことで悲嘆した人や、悲嘆した人と寄り添い起きたことと向き合ってきた人は、事態と向き合いつつも、他者と共感し、共通理解したものについての探求を積み重ねて、最終的には、次の世代に伝えるべきものを構築してきたのである。そして、このように構築してきたものを次世代に伝えるためのスタンバイの時期を迎えつつあるのである。人生の中年期から、大震災を経験し、このような公共圏の中に入り、次世代へ向けての活動を用意して生きてきた筆者たちは、この人生がなんであったかの集大成を思考する段階に到達しているのではないだろうか。このことを、この公共圏にかかわった多くの人々と分かち合いたいのである。

注

1）　麥倉哲（2021）94 頁。
2）　高橋和雄（2014）ｉ頁。
3）　藤岡裕美（2003）77 頁。

参考文献

藤岡裕美，2003,「生涯学習論の枠組みに関する理論的考察 ――ケアの検討を通して」『日本社会教育学会紀要』(39)：73-82.

岩手大学教育学部社会学研究室，2018,「平成 29 年度　大槌町･盛岡市における傾聴支援･サロン活動による心の復興事業 ――岩手大学教育学部―実績の概要」岩手大学教育学部社会学研究室・プロジェクト責任者　麦倉哲.

岩手大学教育学部社会学研究室，2019,「2019 年度　大槌町・盛岡市における『サロン活動』による心の復興事業 ――心の復興サロンと語り継ぐサロン」岩手大学教育学部社会学研究室生きた証を記録し語り継ぐ会.

岩手大学教育学部社会学研究室，2020,「2019 年度　大槌町・盛岡市における『サロン活動』による心の復興事業 ――心の復興サロンと語り継ぐサロン」岩手大学教育学部社会学研究室生きた証を記録し語り継ぐ会.

岩手大学教育学部社会学研究室，2021,『東日本大震災伝承記録誌 ――東日本大震災遺族の心をつなぎ伝承する活動』岩手大学教育学部社会学研究室生きた証を記録し語り継ぐ会.

麦倉哲，2016,「生きた証プロジェクトのもつ意味や意義 ――大災害後の歴史的テーマは『すべての犠牲者と向き合うこと』」『現代の社会病理』(32)：5-22.

麦倉哲，2017,「東日本大震災遺族における『死者との相互行為』 ――岩手県大槌町での経験を中心に」『岩手大学文化論叢』(9)：27-149.

麦倉哲・野坂真，2019,「東日本大震災遺族の生の軌跡と心の復興に関する研究」『公益財団法人 明治安田こころの健康財団研究助成論文集』(54) :135-144.

麥倉哲，2021,「“震災の何を伝承するか、どう伝承するか ――焦点は『災害犠牲死』と『公共圏』”」『教職研修』(3)：94-95.

大槌町，2017,『東日本大震災犠牲者回顧録「生きた証」』(平成 28 年版).

大槌町遺族会，2015,『大槌町英霊録』復刻版，大槌町遺族会.

高橋和雄編著，2014,『災害伝承』古今書院.

From Living Testimonies for Transmission of the Disaster Experience: A Case Study of the Efforts of the Association for Passing Down Living Testimonies from the Great East Japan Earthquake

Mugikura Tetsu

Abstract:

From the examples of efforts that have been undertaken in the areas affected by the Great East Japan Earthquake, we considered what tradition is and who passes down what traditions. The focus of transmission of tradition is to face the deaths of disaster victims and to contribute to the sustainability of the community. We also looked at what kind of activities the members of the Association for Passing Down Living Testimonies from the Great East Japan Earthquake and the regular participants of the Tradition Salon have engaged in. We also shed light on how each member/participant who works for a limited period can connect with others and establish and transmit the wisdom of the community that protects lives from disasters.

Keywords:

disaster testimonies, disaster deaths, community sustainability, public sphere, disaster verification